

Friends project 報告書

牧元桃子

この1年間のゼミ活動を通じて、人と向き合うとはどういうことなのか？社会を問い直すとはどういうことなのか？常に問い続けてきたように思う。

ゼミを始める前までは、「対話」の大切さを言葉では理解できた気になっていたし、それほど難しいことでもないと思っていた。けれど、ゼミの授業、ふれあい館でのフィールドワーク、研究といった活動の中でそのことを考えるたびに、その奥深さと難しさを実感した。ゼミの文献購読やディスカッションですごくしっくりきた！と思っても、実際にフィールドワークで実践しようと思うとなかなか思い通りにいかない。その連続であった。

この1年間を振り返って、彼らと深く関わっているのか、対等な目線で対話できているのかと言われるとまだまだな部分もたくさんある。多分、まだ自分の中で相手の中に踏み込むことを恐れているのかもしれない。こんなこと聞いていいのだろうか、嫌な気持ちになったらどうしよう、とりあえず今日は聞かないでおこう、と。それに加えて、今まで生きてきた中で得た知見の中で物事を捉えようとしてしまっているのだと思う。ただ、大事なことはそうした弱さや未熟さを自覚した上で対話をあきらめずに続けることだと、このゼミで学ぶことができた。ふれあい館の生徒、健さん、あきらさん、クルド難民の人々、彼等をサポートする日本人、塩原先生、ゼミ生のみんな——。様々なバックグラウンドを持つ人々と接する中で、時間をかけながら得られた一つの“答え”だと思う。

今後も、かれらと接していく中で対話をし続けること、具体的には、自分を知ってもらうこと、積極的に相手を知ろうとすることをし続けていきたい。

私自身は文学部に所属していて、ゼミ選びの時は負担やリスクなどを考えて他学部のゼミに行くかどうかかなり迷っていた時期もあった。けれど、今こうして振り返ると塩原ゼミに入るという決断をして本当に良かったと思う。

来年度からは9期も入ってくるので、自分たちが学んだことや反省点などをしっかりと共有しながら、より良いフィールドワーク活動、そしてゼミづくりに貢献していきたい。

Friend's Project 報告書

8期 伊澤征

ゼミに入った当初は「フィールドワーク」という言葉が実際に何を意味するものであるか理解できていなかった。ただ、入ゼミでお話をしてくださった先輩方がどなたも魅力的で、そこに自分は惹かれ、「フィールドワーク」というものもこの人たちが言うようにきっと楽しくて学びの多いものだろうと思い、ここに入ることを決めた。一年間活動を通して、「フィールドワーク」という言葉の意味とそれが実際にどのようなものであるかを体験することができた。また、先輩方ともよりたくさん話をすることができ、自分を振り返って考えることもできた。

はじめ、「フィールドワーク」は「調査」に近いようなもので、現地に言っ
て人の話を聞くことでその人たちのことを「知る」ことが目的のようなイメージを抱いていた。しかし、その点では、ゼミが活動として行っている鶴見や市立川崎高校での居場所作りはそのためには非効率的なようなものを感じてしまっていた。生徒の生活や悩みを知り、またその生徒の勉強を助けることが目的であるならば、「居場所」を作って、そこに毎週一回だけ行って、お菓子を食べたりしながら部活の話を聞いたりするのはあまりにも回りくどくて、無意味なのではとさえ感じていた。しかし、一年間続けて「フィールドワーク」という言葉の意味を理解することができた。毎週同じ場所に決まって行き、生徒に会うというそれだけのことが「居場所」を作り上げ、またそこにお互いが意識的に集まることによって、お互いのコミュニティを超えて交流することができるようになっていくのである。「調査」することや「知る」ことを目的に「行く」のではなく、「行く」ことが大事で、「目的」はそれから始めて見え始めてくるものだったように感じた。

この活動によって自分がどのように変化したかという問いの答えははっきりとは分からない。変わったとも言えないし、変わっていないとも言えない。しかし、活動を通して出会った生徒は一人一人が自分の中でかけがえのない存在であり、他人と割り切ることはできない存在になっていったのは間違いなく言える。それはそれだけで幸せなことなのだと思う。

Friends Project 報告書

8期 細田加苗

塩原ゼミに入ってから一年、先生との出会い、ゼミ生との出会い、ラウンジでの生徒達との出会い、ラウンジを支援するスタッフや先生との出会い、自身の研究でのフィールドワーク先のスタッフ、インストラクター、子供達、保護者との出会いなど、数え切れなほどの出会いがあった。今振り返ればそのどれもが私に何らかの変化をもたらすものであり、非常に価値ある出会いだったと感じている。

ラウンジの生徒やゼミ生、その他出会った人々は皆本当に多様な考えを持っていて、いつも驚かされていた。正直、私はもともと自分の考えを心の奥にしまいつつ何となくその場にいるような性格なので、意見が異なる人や合わないと感じた人とは無理に深く関わりたくない、踏み込むことが怖いと考えていた節があると思う。なので、ラウンジや論文のフィールドワーク先で会う人々と深く関わらなければならない、向き合わなければならないという状況が初めは少し苦痛だったし、ゼミの活動を重荷に感じたことさえあった。

しかしそんな時、周りのゼミ生の姿を見て、今の自分ではいけないと改めて気付かされた。ゼミ生は皆、生徒の相談に乗ったり、個人LINEで積極的にやり取りしていたり、進路の相談に乗るために沢山の資料を集めたり、「ただのフィールドワーク先の一生徒」としてではなく、一人の人間として真剣に向き合おうとしているのがとても伝わってくるような接し方をしていた。よく、「私たち大学生がラウンジの生徒の居場所作りをする必要性はあるのか、私たちでなくてはならない理由はなんなのか」ということが議題になるが、少なくとも私は他のゼミ生のそういう姿勢を見て、そこまで真摯に向き合ってくれる身近な大人というのは他にはいないだろうなと私は思う。

私は少しずつでも生徒たちやフィールドワーク先の子供達ときちんと向き合おうと決め、自分なりのやり方で頑張ってみた。時には自分が言ったことが相手を傷つけてしまったのではないかと後悔することもあった。しかし、「相手に干渉しないことには何も始まらない、それがどんなものにせよ、相手との対話があつてはじめて何かを得ることが出来る」という塩原先生の言葉を思い出しながら、恐れることなく干渉していこうと思った。そして今、以前より確実にラウンジの生徒との距離が近くなったと感じるし、フィールドワーク先でも子供達や保護者からより深い気付きを得ることができたと思う。それを教えてくださった塩原先生やゼミ生に、そしてこの一年新鮮な風を私の中に吹き込み続け、多くの発見や学びをもたらしてくれた全ての出会いに感謝したい。

Friends Project 報告書

塩原良和研究会 8期 佐久間響

今更ながら。世の中には、色んな人がいるな一と、痛感しております。

人それぞれ違うリアリティを持って生きている。それは何よりも、塩原ゼミのメンバー見渡した時に感じるものでした。自分の持っているリアリティと大きく重なる人もいれば、全く重ならない人もいて。その重なる面積に比例して親密になると思いきや、むしろ全く重ならない人と仲良くなれたりもしました。不思議です。

ふれあい館にいる子どもたちは、自分とは全く違うリアリティで生きてきたのだろう。そういう前提で接してきました。自分との違いに目を付け、想像力を働かせ、目に見えない闇を探ろうとしました。でも、そうやって手を伸ばした先には、意外と何もなかったりして。

「なんだ、自分達と大して違わないじゃないか。」

ふれあい館メンバーの間でよく出た結論です。それも一つの発見だったと思います。僕たちの思い描くような「貧困」のリアリティ。彼らの生きているリアリティは、ちょっと違いました。それを実感できた経験は、ひとつ、「フィールドワークで得たもの」として、僕の大切な財産にしたいと思います。

もちろん、未だに理解に苦しむことが多々あります。

小学生レベルの計算を理解してくれなかったり、エグイほどの下ネタが飛んできたり、「行政」を「こうせい」と読んだり、受験前なのにゲームばかりしていたり、僕よりはるかに賢い子が偏差値の低い高校を目指したり。

ゼミ生もそう。彼女の芯の強さとか、彼のこだわりとか、彼女の気配りとか、彼の誠実さとか、皆の遠慮とか、自分自身の気の弱さとか。全部挙げたら多分 A4 に収まらないです。

全部、結果なのかなって。ちゃんと理由や原因があって、目に見えるものっていうのは、その複雑な因果関係の果てなのかなって、ちょっとだけ思うようになりました。

それを、理解しようとする粘り強さ。理解できずとも、受け入れる余裕と懐の深さ。その大切さと難しさ、ありがたみを、教わったような気がします。

僕みたいな人間を懐深く受け入れてくれた、ふれあい館の子どもたち、健さん、彰さん、スタッフの方々、ゼミ生の皆、塩原先生に深く感謝しています。

そのすべてが、僕にとって数少ない大切な「居場所」です。

本当にありがとうございました。来年度もよろしくお願いします。(//ω//)

Friends Project 報告書

天野真衣

このフィールドワークで、自分の中で何かが変わったのだろうか。

「生活保護を受けている子たち」という情報しかないまま、はじめてフィールドに向かっていたとき、正直不安でいっぱいだった。今まで、自分と同じような環境で育ってきた人としか接する機会がなかったためにどのようにコミュニケーションをとればいいのか分からないだろうと思っていたからである。しかしコミュニケーションを会話することと認識するのなら、それは杞憂に終わった。初めて会うわたしにも、中学生は積極的に今日あったことなどを話してくれたのである。前期に担当していた、不登校の少女たちも、確かにわたしの今までの経験と生活からはかけ離れた生活を送っていたが、話すときは一人の中学生として、会話できた。勉強面では一から説明しなければならない難しさを感じていたが、コミュニケーションがとれていたので自分のやっていることに対して疑問も持たなかった。

後期に入り、前期とは違う子を担当することが多くなった。その子たちは前期の不登校の中学生とは違い、部活もやって、副委員長をやって、どちらかというとなたしとも似た中学生生活を送っているように見える生徒たちであった。しかしながら、当時感じていたのは、その子たちとの「壁」である。自分とではなく、生徒同士だけで成立してしまう会話に少し寂しさを感じていた。彼女たちがふれあい館に来ている理由は、勉強するため、であり、わたしはそれをサポートする係、そういう関係からなかなか前へ進めない自分にもどかしさを感じ、ふれあい館に向かう足取りが重い時期もあった。当たり障りのない会話のみで成り立ってしまい、一歩深いところに進めない。何かを踏み込んで話すような関係に、まだなれていない、なるべきだと感じていたのである。

自分の代わりは誰でもできる、そういった関係は変わらずに終わっていくと思っていた。しかし、年明けにふれあい館に行って、感じたことがある。それはわたしが会話をはじめるとはできなくても、わたしが会話を進めることはできなくても、感情を共有することはできるようになったのではないか、ということである。たとえば二人が笑ったとき、そのおもしろい画像を自ら見せてくれるようになった。まだまだ自分と中学生は、中学生からすると生徒と先生、なのかもしれないが、ある程度距離が近くなったから感情を共有してくれるようになった、と考えたい。

ここで最初の問いに戻る。わたしは何か変わったのだろうか。実際、わたしの内面では何か変わったような気がする。でもここでは先生の最後の授業のお言葉に甘えて、それに名前をつけるのをやめておきたい。しっかりと、自分のなかの変化がわかり、表現できるようになるまでは、間違った名前を付けて思い込んでしまうのを避けたいのである。

Friends Project 報告書

～この一年を振り返って～

佐藤志菜乃

社会学に興味を持ち塩原ゼミの説明会に足を運んでから一年以上、初めて川崎の定時制高校に訪れ、フィールドワーク見学をしてから約一年、フィールドワークを通じて色んな人と出会い、つながることの出来た一年間だった。思ってみれば、自分の勉強、部活やサークル以外のことに力を注いで取り組んだのは初めてだったかもしれない。市立川崎高校の「ふらっとカフェ」に通い始め、初めは生徒と何を話そうかと行く前から緊張し、自分のやっていることが何かの役にたっているのか不安になることもあった。しかし、毎週通う中で「ふらっとカフェ」という空間が私にとっての居心地の良い場所になっていた。生徒のために...と思って活動していたが、明るい生徒達に笑わせてもらい、元気を貰うことの方が多かった気がする。「ふらっとカフェ」が無くなると決まってから、毎週校門の前まで生徒が見送りに来てくれて「寂しい」と言われるのは辛かったが、一年間一緒に活動をさせて下さった ME-net の方や、最後まで私達に選択肢を与えて下さった塩原先生に感謝しております。

また、ゼミの皆との思い出として、私は個人的に三田祭がとても楽しかった。普段のフィールドワークが三つに分かれてしまっている分、製作や本祭中長い時間一緒にいれて良い思い出になった。鶴見やふらっとからも生徒が遊びに来てくれて、普段私達が高校に足を運んでいる分、逆に大学に来てもらうというのも良い機会であったと思う。

ゼミ生含め、この一年つながりを持てた人との関係、毎週のフィールドワークで感じたことや授業で学んだことを忘れずに自分の中にしまっておきたいと思う。



鶴見の夜教室に関わることができて心から嬉しく思う。一年を通して、中・高生とともに私自身も大きく成長できた気がする。私が鶴見に通い始めたのはちょうど去年の3月である。まだフィールドワークの意義もよくわからず、先輩たちの話に頷きながらもどこか深く理解していない自分がいたのを覚えている。そして、ただひたすら何かを探しにフィールドワークに行く自分がいた。でも、フィールドワークを重ねるごとに生徒たちとの距離が縮まり、いつの間にか彼・彼女らの生活の中に私が存在していることに気づいていた。そして、信頼関係を築いていく中で夜教室の意義を少しずつ自分なりに見いだすことができた。ロイスのアルバイトの店長とのメールのやり取り、のぶおの彼女との接し方、ファウレとのスケボー練習。フィールドワークの日以外でも彼・彼女らと接するようになった。彼・彼女らがきっかけで東南アジアや南米に行くこともできたし、同じ異文化で過ごしたものとして共通の話もたくさんできた。私は彼・彼女らから本当に多くのことを学んだし、多くのこと（勉強はあまり教えられなかったが）を教えてあげられたと思う。彼・彼女らにとっての居場所作りを活動の目標としてきたラウンジだったが、フィールドワークメンバーの大学生にとっても土曜日のラウンジは欠かせない居場所になっていったような気がする。10月以降は生徒よりも大学生が生徒に悩みなどを聞いてもらっている場面を何度か見た気がする。私は鶴見での活動を通して「人」についての理解を深めることができたと思う。今後もこの活動を通して得たものを活かしながら過ごしていきたい。



Friends Project 報告書

8期 吉川瑞穂

発言する時の声が大きく、態度がでかいことによって、よく社交的な人物と勘違いされる私だが、本当は人一倍の人見知りであり、内弁慶であり、不器用な人間であるということを自覚している。その私が、週4で共に行動をしていたクラスの人たちのグループから飛び出し、「ゼミ」という新しいコミュニティーの中に飛び込み、さらには鶴見よる教室というフィールドで、今まで出会ったことのないバックグラウンドを持っている生徒たちと共に活動していく、ということは私にとって、人生の中でもなかなか大きなステップであった。私はこれを「出来事」ではなく、「ステップ」として表現したい。というのも、1年間の活動を通して何らかの形で自分が成長できたことを、この文章を書きながら実感しているからである。

一年間のフィールドワークを通して感じたことの一つに、いかに「積極的」であるかが重要であるかということがある。「聞いていいこと」と「聞いてはいけないこと」の判別をどうしたらいいかという問題は、他のゼミ生たちと話す度に話題になる。まだまだ戸惑うこともたくさんあるが、時には勇気を出して聞かなくても聞けないと思っていたことを生徒たちに投げかけることも必要であるということが段々分かってきた気がする。そうすることによって、意外とその事柄とは自分が気にしていたほどのことでもないということがわかったりするのである。初めは当たり障りのない話ばかりしていたのも、今は少しずつだが、生徒の過去の話だとか、将来の夢とかを聞けたりしている。初めのころは、やはりどうしても受け身の態勢に入ってしまう、生徒たちから色々なことを話してくれるのを待っていたところがあるが、それでは仲も深まらないし、私たちの目指している「対話」とは遠いものになってしまう。悩み過ぎて時には泣いてしまうこともあるけれど、そうして色々なことを考えたり話し合いながらこれからも前進して行きたいと思う。

FWCとして来期からは9期とより多くのイベントを企画していきたい。去年はBBQ、夏合宿、クリスマスパーティーなど、季節と関連づけて企画していたところがあったが、今度は生徒たちの意見も聞きながら、スポーツ大会だったり映画鑑賞だったり、もっと色々なテーマのイベントを開催していけたら、生徒たちにとっても、私たちにとってもより魅力的なラウンジになるのではないかと思う。褒められる点よりも断然反省点の方が多く、これからへの課題もたくさんできた一年だったが、一年前には想像していなかった色々な発見や楽しみがあった一年でもありました。ゼミのみんな、先生、FWC、そしてつるみにきてくれる中学生高校生のみなさん、本当にありがとうございました！

ご存知の方もいるかもしれないが、実は、私のことを大学で「みっちー」と呼んでくれる友達はあまりいない。1年からの友達は生真面目な人が多く、「道上くん」と呼ばれるし、語学のクラスでは下の名前だから「やすあき」と呼ばれる。「みっちー」と呼ばれるのは、ゼミ以外の大学の友達なら、簡単に片手で収まる。中学、高校とその6年間は「みっちー」で過ごしてきた。だから、「みっちー」と呼んでくれるゼミはとても暖かく、どこか懐かしく感じ、そして私にとって一つの「居場所」である。

名前とは、最初にその人を表現する言葉であると思う。そして、それを知り、どう呼ぶかが、人間関係を作るうえでまず重要になると考えている。フィールドワークでも、最初にお互い聞き合うのは名前だろう。私にとって、来てくれる生徒たちの名前を覚えることはなかなか困難であった。覚えられない、というよりなんと呼べばいいのかわからない、というほうが正しいかもしれない。そんなことでちまちま悩んでいるうちに、周りのゼミ生は名前を覚え、呼び合う段階をクリアしていく、自分は取り残される...という状況に嘆いたことも少なくはなかった。やはり、名前を呼ばない、呼んでくれないことは、人間関係を深める段階のはじめの一步を、盛大に躓いて鼻血を出すようなものだった。

今でこそその問題はとっくに飛び越えてはいる。ゼミ生同士はもちろん生徒たちとも、距離を縮められてきたと思う。だが、その中で「大学生は自己開示をしてきていない」という声があ

った。振り返ると、少なくとも自分には当てはまった。生徒にも、ゼミ生にも。とくに生徒には、「これから何がしたい」「昨日はなにしてた」「今悩んでることは何」といった質問を一方的にするだけで、自分のことを話すことはあまりなかった。コミュニケーションにおいてお互いに自分のことを話し合うことは大変重要だが、忘れていた。その点が、反省したいところの一つだ。

そのほかにも、先輩がいないことの苦勞や、行事をあまり開催することができなかったことなど、いろいろな反省点があるが、それは最後にゼミ全体で振り返ったばかりであるし、この報告書において他の人が振り返るはずなので、個人的な反省を書いてみた。

ところで、反省というのはなにも悪いことだけを振り返るものではない。良かったことは、自分に自信がついたことではないかな、と感じている。例えばゼミにおいてたくさんの素晴らしい人に出会えたこと...これは何とも言うのが照れくさいが、素直に大学生活をさらに色濃く、鮮やかに、広げてくれた。今までなら読む機会がなかったであろう文献を読み、まとめ、自分の意見を述べる機会がたくさんあったこと...まだまだひるんで言えなかった自分の意見もあるが、自分の考えを聞いてもらい、それについての意見をいただくことはとても貴重なものだった。そして、フィールドワークの場所において、座学だけ、考えるだけでは決してわからなかった多くの物事に気づけ、体験として身に着けられたこと...フィールドワークやインタビューを通じて、実際現場で起きていること、現場に立つ人の話を見聞きすることは、どんなにたくさん本を読んでもかなわないものがあるはずだ。

なかなか自分に自信が持てなかった私だが、経験はうそをつかないと今なら思える。この1年で得た自信を胸に、自分のため、そしてこれからのゼミのためにも、一步ずつ進んでいきたい。

Frends project 報告書

31450109 8期 赤澤真由子

塩原ゼミで過ごした一年間は、日々インプットとアウトプットの繰り返しでした。もともとじっと本を読んで知識を蓄えたり、論理的に結論を導くことが苦手だった私にとって、フィールドで経験を積むこと、論理的な結論はでなくとも、何かを考え始めるきっかけや気づきを得た過程を評価して下さるこのゼミは、それこそ居場所です。

教職課程の授業も受けていた私にとって、川崎や鶴見のフィールドワークに行くところは、子供の貧困問題の現場を目で見ることであり、改めて、保護者や学校の教師だけでなく、それこそ健さんや私たちがやっているような、ソーシャルワーカーのような立場の存在、場所の必要性を強く感じました。

この一年間、自分が通ったフィールドに何か自分なりの軌跡を残せたのかというと、正直自信がありません。この一年間は現場を知り、生徒たちと信頼関係を築く過程までで終わってしまったような気がします。私はフィールドワークをする際に「自分にしかできないことをしたい、自分にしかできない生徒との関わり方がしたい」と思っていたのですが、今は、必ずしもそういうものではないのかもしれない、と思っています。特にふれあい館に通っていた際に、「この先生じゃないとだめ！」という生徒ももちろんいたのですが、「勉強を教えてくれるなら、話を聞いてくれるなら先生が誰でも変わらない」というような生徒もいて、サポーターとしての在り方、役割に正解はないのだと改めて感じたこともありました。

12月頃から他の活動が忙しくなってしまう、フィールドワークに行ける回数が減ってしまったことが心残りです。就職活動も始まってしましますが、やはり通い続けることに一番意味があると思っているので、今年度も何かを感じ考えるために、フィールドワークをはじめ、ゼミの活動にも真摯に取り組んでいきたいと思えます。

